

岡崎市 上下水道事業
サービスレベルリポート
2025 年度版



岡崎市上下水道局

目次

岡崎市上下水道事業サービスレベルレポート 2025年度版

	第1章 特集
2	下水道管路の維持管理
4	適正な下水道使用料のあり方
6	未来へつむぐ岡崎の水プロジェクト
8	ヘチマプロジェクト
10	デザインマンホール蓋の魅力
	第2章 上下水道事業の経営状況
12	令和6年度決算の状況
14	経営トピックス
16	数字でみる上下水道事業
	第3章 令和6年度の主な取組
18	上下水道ビジョンの基本方針と施策方針
24	上下水道ビジョンの指標実績
26	サービスレベルフレームワーク
	資料編
30	用語解説

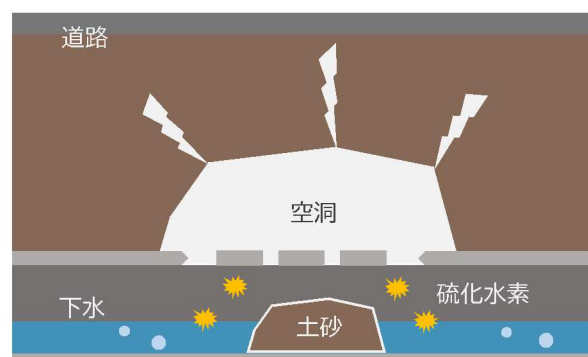
1

特集Ⅰ
下水道管路の維持管理

八潮市道路陥没事故

令和7年1月28日、埼玉県八潮市にて大規模な道路の陥没事故が発生しました。原因は、昭和58年に整備された管径4.75mの流域下水道管路の破損によるものと考えられています。

この事故は、周辺住民への避難勧告や関係市町の120万人に対する下水道の使用自粛要請といった広範囲への多大な影響を及ぼしました。

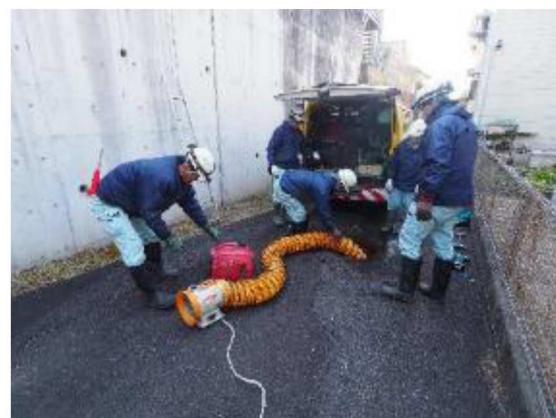


下水道管の劣化による道路陥没の仕組み

1. 汚水などから発生した硫化水素が空気と反応し硫酸となって下水道管を溶かす。
2. 古くなり腐食が進んだ下水道管が破損し、そこへ土砂が流れ込み、地中に空洞ができる。
3. 時間が経過するにつれて地中の空洞が大きくなり道路の陥没につながる。

全国特別重点調査の実施

令和7年3月18日、国土交通省は、このような事故を未然に防ぐことを目的とし、「全国特別重点調査」の実施を自治体へ要請しました。設置・改築から30年以上経過した管径2m以上の下水道管路を対象に、腐食しやすい箇所などを優先的に実施することとしました。調査方法は、下水道管路へ潜行しての直接目視による確認です。



岡崎市の状況

本市では、下水道法や公益社団法人日本下水道協会が示す調査頻度を基に、平時から腐食のおそれがある管路や陥没により被害が想定される重要な管路、路線について点検調査を行っています。

直近の令和4年、5年に行った点検調査では、調査延長17.9kmのうち、破損や腐食といった速やかに措置が必要とされる箇所が約19m発見され、随時、修繕等を行っています。



ビデオカメラによる映像(イメージ)

令和6年度末現在の法定耐用年数50年を経過した管路は、総延長1,932.7kmに対し111.5kmであり、老朽化率は5.8%となっています。

今後も管路等の点検、管理に着実に取り組み、市民生活に不可欠なライフラインである上下水道の機能を維持していきます。



特集Ⅱ

適正な下水道使用料のあり方

使用料改定の検討経過

本市では、水道事業と下水道事業の適正かつ効果的な運営を図るため、市長の諮問機関として学識経験者、水道や下水道の使用者の代表者、市民公募委員などから成る「岡崎市水道事業及び下水道事業審議会」を設置しています。

下水道使用料は、安定した下水道事業経営を継続することができるものでなくてはならず、その妥当性については定期的に見直すことが求められています。

本市では令和6年7月に「適正な下水道使用料のあり方について」を諮問しました。（下図の諮問）

そして、令和7年10月に審議会から「令和9年度から平均改定率27.5%の使用料改定が必要である。」という内容の答申が提出されました。（下図の答申）

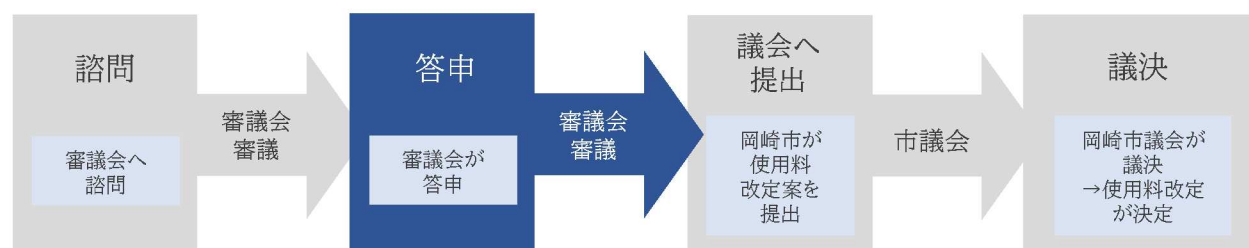


「適正な下水道使用料のあり方について(答申)」の提出(令和7年10月15日)

この答申内容に関して岡崎市長は、「市民生活は物価高騰の影響などを受けて大変厳しい状況が続いており、下水道使用料の改定が市民生活や経済活動に及ぼす影響も見極めながら適切に判断していく。」とのコメントを発表しています。

ここからは、平均改定率27.5%が導き出された背景やその具体的な意味についてご説明します。

下水道使用料改定までの流れ



投資計画を策定

投資計画とは、下水道管やポンプ場の建設工事や更新工事の費用に関する計画です。審議会では、令和6年度に策定した下水道管路整備計画及び下水道施設整備計画に基づき、投資計画の妥当性について審議されました。

下水道管路整備計画では、①老朽化対策、②地震対策、③雨水整備、④汚水整備を進めることとしています。

老朽化対策は、古くなった下水道管を更新する事業です。これまでは、施工年度の古い順番に更新する「時間計画保全」を行ってきました。これからは、調査・診断を行い状態が悪いものだけを対象に更新をする「状態監視保全」の手法を導入します。これにより、リスク面では現状の良好な状態を維持しながら、コスト面では年間の平均投資額を約38.9億円から約14.9億円に抑えることができます。

地震対策は、南海トラフ地震への備えとして、被災した際における長期間の下水道の使用停止を避けるため、必要な施策と位置付けています。防災拠点や避難所からの管路などの「重要な幹線等」を令和15年度までに耐震化率100%を目指すこととしました。

また、下水道施設整備計画では、ポンプ場などの更新にあたり各設備に本市の実情に合わせた目標耐用年数を設定し、時間計画保全による更新需要を算出しました。

下水道事業の経営状況

近年の物価高騰等により、経営状況は急激に悪化しており、令和6年度には、12年ぶりの赤字決算となりました。また、ここまでの投資計画と財政計画を合わせた収支見通しを計算すると、引き続き赤字が見込まれ、令和11年には資金が枯渇し事業が継続できないことが見込まれました。

27.5%の使用料改定が必要

審議会では、下水道事業の安定経営のために必要となる目標資金残高について検討を行いました。「東日本大震災」「熊本地震」といった、大規模な災害における事例に鑑み、半年分の現金支出から一般会計繰入金を除いた額が妥当との結論に至り、35億円を目標資金残高としました。

令和8年度末時点の資金残高は約20億円を見込んでおり、目標資金残高と15億円の乖離があるため、算定期間初年度に目標資金残高を確保しようとする58.1%の改定が必要となります。しかし、今後の資金がたまりすぎること、市民負担の急激な増加等の問題があることから、目標達成期間を令和18年度まで延長することで32.3%、さらに企業債の借入条件を見直すことで27.5%まで抑制されました。

どの程度の負担増になるのか

27.5%の改定について、使用料体系のどこを改定するのが適切なのか、①公平に負担を求める体系、②中立で偏りのない体系、③安定した経営につながる体系の3条件を満たすよう以下のとおり議論されました。

- ①施設の規模に応じて整備費や維持管理費が決まるため、各従量帯の水需要に応じた体系とする。
- ②特定の受益者に依存しない体系とする。
- ③安価に設定された従量使用料収入の割合を高めることにより、将来の水需要の減少に影響されにくい体系とする。

前回の使用料改定から17年が経過し、生活様式、世帯人員構成の変化に伴い使用料収入における低従量区分の割合が大きく伸びていることから、下図の改定案が答申されました。

		現行	改定後	増減額
基本使用料		700 円	914 円	214 円
従量使用料	1～10㎥	10 円/㎥	52 円/㎥	42 円/㎥
	11～25㎥	105 円/㎥	96 円/㎥	△ 9 円/㎥
	26～50㎥	165 円/㎥	189 円/㎥	24 円/㎥
	51㎥～	210 円/㎥	270 円/㎥	60 円/㎥



▲活動拠点とする桑谷山エリア。乙川の支流である竜泉寺川や山綱川を擁しており、水循環の仕組みが体感できる場所を目指します。また、三河湾を一望でき、眺望も優れています。



▲令和5・6年度は峰川浄水場の水源にて林分調査、ロープワーク、間伐等の実地体験を実施しました。

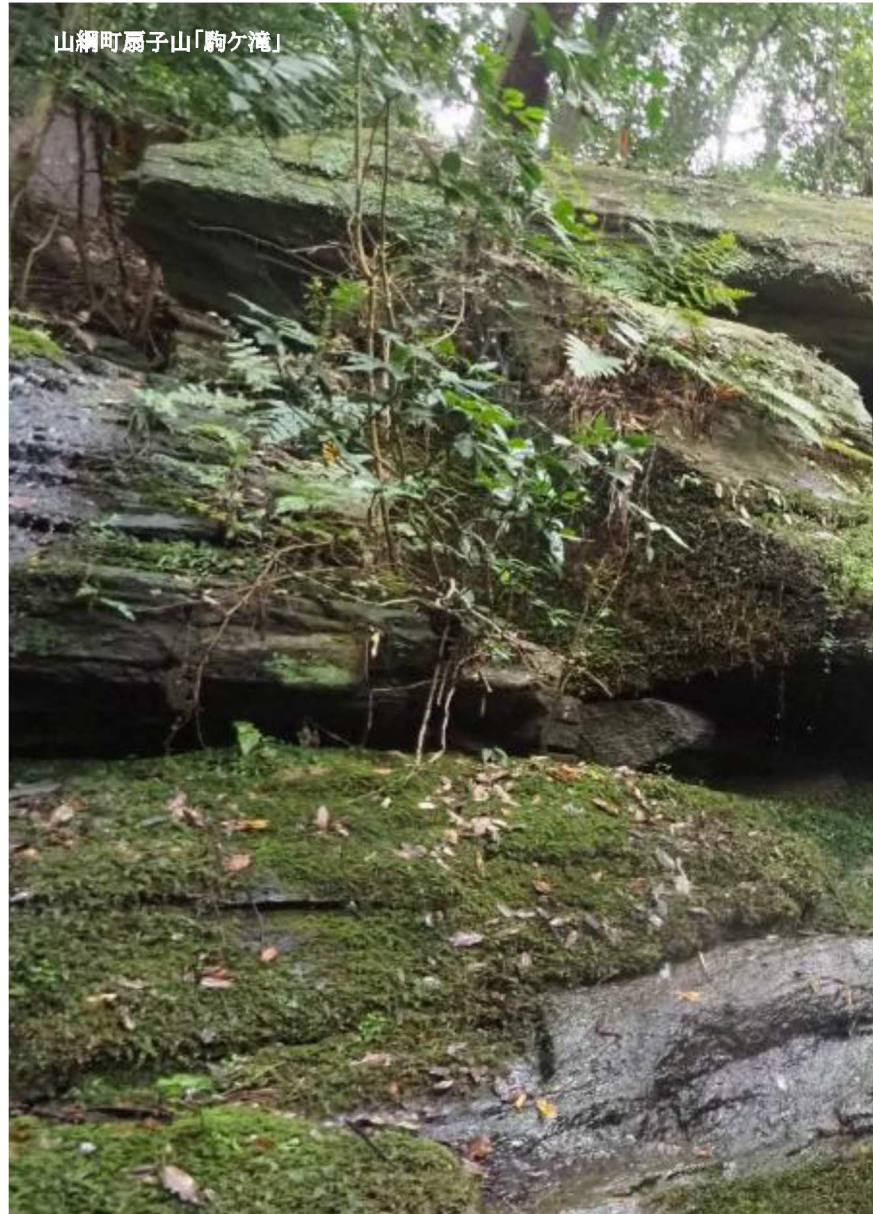
プロジェクト参加企業一覧

株式会社石垣名古屋支店
株式会社エステム
岡崎市管工事業協同組合
株式会社クボタ中部支社
コスモ工機株式会社名古屋支店
第一環境株式会社
大成機工株式会社名古屋支店
株式会社日水コン名古屋支所
日本鋳鉄管株式会社中部支社
日本水工設計株式会社名古屋支社

問合先

経営管理課企画調整係
0564-23-7565

山綱町扇子山「胸ヶ滝」



現在、本市とともに10の民間企業等が当プロジェクトに参加し、活動を行っています。水源保全は、多くの市民や企業に参加いただくことで、わたしたちの水源を守り、養い、大切な資源を次世代へとつむぐことができると考えています。

当プロジェクトは、3年間をひとつの周期として活動しており、令和8年9月には2期目の区切りを迎えようとしています。これまで水源地域の各所で行ってきた環境学習、間伐体験や清掃活動の経験をもとに、今後は活動拠点を定め、より具体的に当プロジェクトを継続することで、理念の実現につなげていきます。

特集Ⅲ

未来へつむぐ 岡崎の水プロジェクト

皆さんは日々の生活に欠かせない水道水がどこから来ているかご存知ですか。本市の水道水の水源は、乙川上流の山々の森林や土壌により育まれています。

森林の土壌は、降水を貯留し、河川へ流れ込む水の量を平準化して洪水を緩和する機能を持っています。また、雨水が森林土壌を通過することにより水質が浄化されます。これらの「水資源貯留機能」、「洪水緩和機能」、「水質浄化機能」といった役割は「水源涵養機能」と称されています。

水源涵養機能を持つ水源林の保全は、水道の安定供給を使命とする岡崎市上下水道局が取り組むべきテーマのひとつと言えます。そこで本市は、令和2年に乙川上流域の水源保全を推進するためのプロジェクト「未来へつむぐ岡崎の水プロジェクト」を立ち上げました。

乙川上流域における森林の保全を公民連携して取り組むことで、次世代にわたって安定した清らかな水資源を確保し、また、情報発信を通じて水源地保全の重要性や水道事業への理解・信頼を高め、地域社会に貢献することを理念としています。

特集IV

光ヶ丘女子高等学校×岡崎市上下水道局

ヘチマプロジェクト



環境学習

生徒と協同し事業を行うにあたり、下水道事業とSDGsの関係性について授業を行いました。

プラスチックたわしの代わりに、自然由来のヘチマたわしを使用することでマイクロプラスチックの発生を軽減できることを伝え、下水を流した「その先」を考え、意識づけることができました。

種まき

ヘチマを種から育て、たわしを作成するため、生徒と種まきを行いました。育てるにあたり、上下水道事業に関連した資材や廃材を積極的に採用しました。土は仁木浄水場の浄水処理汚泥を、肥料は下水処理汚泥を含んだものを一部使用しました。

プランターへ移し替え

ヘチマの発芽に合わせ容器を移し替えました。プランターは廃棄予定のものを引き取り再使用しました。プランターの土にも仁木浄水場の浄水処理汚泥を、肥料は下水処理汚泥を含んだものを一部使用しました。

追肥

ヘチマの成長を促すために追加で肥料を与えました。ヘチマが巻き付くネットは光ヶ丘女子高等学校のソフトボール部で使用していたものを再利用しました。

ヘチマ化粧水作成

ヘチマの用途の多さを体験するため、茎からヘチマ水を採取し化粧水にしました。

SDGs・おかげさ魅力発信展

イオンモール岡崎のイベントでは、ヘチマプロジェクトの紹介に加え、生徒たちが考案したアクティビティで下水道について市民に啓発しました。

ヘチマたわしの作成

光ヶ丘女子高等学校で育てたヘチマでたわしを作成しました。枯らして茶色くなったヘチマの表面の皮をめくり、ヘチマの実の中にある種を取り出して、たわしを作成しました。

ヘチマたわしの活用

たわしを使用し、3年間お世話になった学校への感謝を込めて清掃を行いました。また、自宅に持ち帰り食器を洗うことなどに活用してもらっていました。

種の継承

想いととも種を後輩に引継ぎ、翌年度も継続して実施します。

プロジェクトの概要

下水道事業

- 下水汚泥資源の肥料利用
- 流した「その先」を意識できる授業
- マイクロプラスチック発生量軽減

SDGs

- 廃材や不用品の利活用によるアップサイクル
- グリーンカーテンによるCO2削減
- ヘチマたわしを使うことによる環境負荷の軽減

市民向けイベントへの出展

- 生徒がインターンシップとして市民向けイベントへ参加
- イオンモール岡崎でブース出展
- SDGsの意識向上と下水道の魅力を生徒が市民へPR

①下水道の役割・ポテンシャルの高さを

正しく知る・理解する

②生徒自ら下水道広報マンへ成長



問合せ先

サービス課お客様サービス係
0564-23-6309



プロジェクトの背景

本市が令和5年度に開催したマンホールサミットにて、光ヶ丘女子高等学校は下水道とSDGsに関連する企画展示を実施しました。

令和6年度、学校との話し合いの中で、生徒にとって身近な下水道はトイレか台所ではないかと先生からご意見をいただきました。そこで、台所を下水道への入口とみなし、プラスチックたわしの代わりにヘチマたわしを作成する事業を立ち上げました。

生態系への影響が懸念されるマイクロプラスチックは、身近に使われているプラスチックたわしも原因の一つに挙げられます。これを自然由来のヘチマたわしに置き換えることで、排水から海に流れ出るマイクロプラスチックの削減につながります。

下水道とSDGsを関連付けて学習、理解してもらうことで下水道の認知度や必要性、つまりプレゼンス向上を目指し、ヘチマの栽培とたわしの作成に取り組みました。

特集Ⅴ デザインマンホール蓋の魅力

街を歩けば足元に広がる小さな芸術、マンホール蓋。かつては無機質で一様だった蓋も、今では地域の文化や歴史、自然の魅力を描くキャンバスへと進化しました。

日本のマンホールの歴史は古く、明治初期に横浜居留地で建設された近代的下水道にさかのぼるといわれています。当初は木製の格子状の蓋でしたが、その後、鋳鉄製の格子形、そして現在の丸形マンホール蓋へと変化しました。明治末期から大正にかけては、西洋のマンホールを参考に、東京型や名古屋型といわれる線や円を規則的に組み合わせた幾何学模様の蓋が全国に広まりました。昭和33年にマンホールのJIS規格が制定された際は、東京型の模様が規格となったようです。

その後、昭和52年、那覇市が全国で初めて魚をモチーフにしたデザインマンホール蓋を採用したことが転機となりました。昭和60年代以降、建設省（現国土交通省）の提唱もあり、下水道事業のイメージアップと市民理解の向上のため、全国的にデザインマンホールの設置が加速していきました。

一方、本市では、昭和62年に市制70周年を記念して初のデザインマンホール蓋を導入しました。それには、さくら名所100選に選ばれた岡崎城と桜、伝統の三河花火が描かれています。

また、令和5年度、下水道事業100周年という節目を迎えるにあたり新デザインを決定しました。岡崎の市街地や水辺をテケテケと歩く「ハクセキレイ」をモチーフに岡崎城や乙川・花火・桜をあしらった市民に愛されるデザインになりました。他にも10種類を超えるデザインのものが市内各地に設置されています。

今では、マンホール蓋ひとつひとつに季節や地域の草花、城や伝統行事、キャラクターなど、その土地ならではのモチーフが彩り豊かに表現され、まち歩きの楽しみの一つにもなっています。

また、鋳物としての立体感や陰影が美しく、蓋ごとに異なるデザインは、「ご当地マンホール」として人気を集め、写真に収める人も増えています。

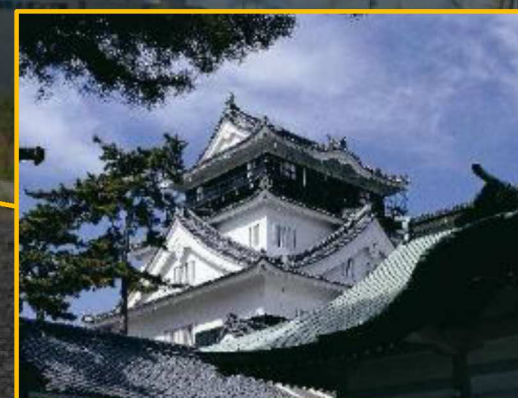
日常の中に潜む芸術作品に目を向け、街の新たな表情を見つけてみませんか。マンホールは、私たちの暮らしを支えながら、地域への愛着を育む大切な存在となっています。

新デザインマンホールふた「テケテケさん岡崎を歩く」

水辺を歩くハクセキレイ、三河花火、岡崎城、桜並木といった岡崎を代表する生き物や文化・歴史の魅力が直径60cmのマンホール蓋からあふれています。



三河花火



岡崎城



ハクセキレイ



桜並木